

義父に命じられクリトリス授乳 ～義父のクリマッサージ&クリ吸引～

1

東京駅から新幹線で二時間半、そこからローカル線に乗り換えて一時間。

駅前のロータリーから孝之さんの運転する車に乗って、さらに四十分。窓の外の景色はみるみる田畑になり、やがて山の影に吞まれていった。携帯の電波は途中で一本になり、いまは圏外を示している。

「ごめんな、奈々。遠くて」

「ううん、大丈夫」

わたしは膝の上で眠っている娘を見下ろした。生後三ヶ月の理沙(りさ)は、長旅にも関わらず驚くほどおとなしく、薄い瞼を閉じたまま小さな息を立てている。お宮参りも終わり、ようやくこうして孝之さんの実家まで連れてくることができた。

「父さん、緊張するなって言われても緊張するよな」

ハンドルを握る孝之さんの横顔が、わずかにこわばっている。銀縁の眼鏡の奥の目が、いつもよりさらに伏せがちだ。

「お義父さん、孫に会えるの楽しみにしてるって言ってたんだよね？」

「うん。……たぶん」

たぶん、という言い方が孝之さんらしくて、わたしは小さく笑った。この人は実家のことになると、いつも歯切れが悪くなる。

孝之さんの実家は、田舎だが立派な日本家屋のお家だった。

長い砂利の参道のような小道を上がっていくと、黒い瓦屋根の平屋がどっしりと構えている。築百年以上だと聞いていた。手入れの行き届いた庭木、磨き上げられた式台、ぴんと張られた障子。「実家」という言葉から想像する気安さは、ここにはひとかけらもなかった。

玄関の引き戸が開く音がして、わたしは慌てて姿勢を正した。

「ご無沙汰しております、お義父(とう)さん」

頭を下げた拍子に、抱いていた理沙が小さく身じろぎする。

顔を上げると、上がり框(かまち)に義父――征一郎(せいいちろう)さんが立っていた。

白髪混じりの髪をきっちりと七三に分け、紺の和服に身を包んでいる。背筋がまっすぐで、孝之さんよりずっと体格がいい。鋭い眼差しがこちらに向けられた瞬間、わたしは反射的に息を止めていた。

「……うむ」

短い返事。それだけ。

「父さん、ただいま」

「遅かったな」

「予定通りだよ」

「予定が遅いんだ」

孝之さんは何も言い返さず、ただ「うん」と頷いた。三十二歳の大人の男が、父親の前ではまるで小学生に戻ったように小さく見える。

わたしは慌てて理沙を抱え直し、もう一度頭を下げた。

「あの、はじめまして……じゃなくて、その、この子が、理沙です」

言ってから、自分の言葉の拙さに耳まで熱くなった。

征一郎さんはわたしの腕の中の理沙をじっと見つめた。眼差しの温度がわからなくて、わたしは抱きしめる手にぎゅっと力を込めてしまう。

「……そうか。元気そうだな。」

たったそれだけの言葉だったけれど、わたしは思わず顔を上げて笑ってしまった。

「ありがとうございます」

すると、ふと征一郎さんの口元が、ほんの少しだけゆるんだような気がした。けれど、わたしが瞬きをした次の瞬間には、もうもとの厳めしい表情に戻っていて、見間違いだったかもしれないと思った。

居間に通された。

黒光りする座卓、磨かれた縁側、欄間の彫り物。昼の匂い。ここに座っているだけで、自分の背筋がいつも以上にまっすぐになる気がした。お茶を出してくれたのは、家事を手伝

いに来ている近所のおばあさんだという。義母が亡くなって三年、この家の家事はそうやって支えられてきたらしい。

「奈々さん」不意に名前を呼ばれて、わたしは肩を跳ねさせてしまった。

「は、はい」

「乳の出は、どうだ」

「……え？」

頬がかつと熱くなった。

目の前に座る義父が、表情ひとつ変えずにこちらを見ている。冗談やからかいの気配はまるでない。ただ、当然のように聞いている。

「あ、はい。出て、ます。あの、ちゃんと、足りて、ます」

しどろもどろになりながら答えると、征一郎さんは小さくうなずいた。

「結構。乳で育てるのが一番だ。粉ミルクに頼つとる母親が多いと聞くんが、あれはいかん」

「……はい」

「夜泣きは」

「ま、まだ、二、三回……」

「夜中に起きるのは嫁の役目だ。孝之を起こすな。あれは朝が早い」

「はい」

わたしは膝の上で両手をぎゅっと握りしめた。孝之さんを見ると、彼は湯呑みに目を落としたまま、何も言わない。「父さん、奈々も大変なんだから」——そんな一言を、ほんの少しだけ期待していた自分が恥ずかしくなった。

「離乳食は五ヶ月から始めるんだろうな」

「あ、はい、そのつもりです」

「最初は十倍粥だ。だしは取るな。塩は使うな。米は土鍋で炊くのが一番うまい」

「はい」

「うちの孝之も、それで育てた」

ちらりと、義父の視線が孝之さんに向いた。孝之さんは身を縮めるように小さくお辞儀をする。

「奈々さん」

「は、はい」

「お前は、よくやっ取る」

その一言を聞いた瞬間、わたしの背中をぞくりと何かが駆け抜けた。

褒められたのだ、と気づくのに、数秒かかった。

厳しい言葉ばかり投げかけてきた義父の口から、急に零れ落ちた肯定の言葉。それは、夫から半年以上もらっていなかった種類の言葉だった。

「……ありがとうございます」

声が、自分でもびっくりするくらい震えていた。

なぜ、こんなに嬉しいんだろう。お義父さんに認められただけで、どうしてこんなに胸の奥が温くなるんだろう。

うつむいた拍子に、腕の中の理沙が小さく「ふえ」と声を上げた。授乳の時間だ。

「あの、お義父さん。すみません、この子にお乳を……奥のお部屋、お借りしてもいいですか」

当然のように、そう尋ねた。

「なにを言う」

厳しい義父の音がする。

「ここでやりなさい」

「え……？」

居間の空気が、凍りついた。

「ここで、やれと言ってる」

わたしは義父の顔を見た。そして、隣にいる孝之さんの顔を見た。

「お、お義父さん？」

「この子の嚥下力が、どうか。お前の授乳のやり方が、正しいか。わたしは確認する必要がある」

(……………え？……………確認？……………授乳？)

「父さん、それは……奈々も恥ずかしいだろう」

孝之さんが、か細い声で反論した。珍しいことだった。わたしは、ほんの少しだけ救われたような気持ちになった。

「恥をかく、のか。母親が子を育てる姿に、何の恥がある」

「いや、でも、だから……」

「孝之、お前は黙っている」

一言で、孝之さんの言い草を遮った。

「昔は、当たり前のことだった。旦那のいる前で、嫁は授乳するもんだ。それが、嫁の務めだった。この土地では、今でもそうだ」

「それは……一部の、古い……」

「黙れ」

声が、低く響いた。

「お前は東京で知ったかぶりを学んできた。だが、ここはわしの家だ。わしの土地だ。ここでのやり方を守るのが、嫁の務めだ」

(ここでの、やり方……?)

わたしの頭の中が、真っ白になった。

「奈々さん、こっちへ来なさい」

義父が、縁側をあごでしゃくった。

「あの……」

「縁側でやりなさい。わしは、そこから見ている」

「お義父さん、やめてください……」

わたしの声は、か細く震えていた。

「孝之さん、お願いします」

わたしは孝之さんに、助けを求めるように視線を送った。

「お義父さん、奈々も疲れていますから……」

「孝之」

義父は、名前を呼ぶだけだった。それだけで、孝之さんは口をつぐんだ。

「……父さん」

「……わしが、この子の初めての食事を見るのは、当然だ。お前が文句を言う筋合いはない」

それには、逆らえない。わたしは、立ち上がるしかなかった。

「……はい、お義父さん」

居間から縁側へ。一段上がる、そのたった数歩の距離が、どれほど長く感じられたことか。

木の床が肌に触れる冷たさ。遠くの虫の声。湿った空気。

わたしは座布団に腰を下ろした。

「孝之さん」

わたしは、もう一度だけ、助けを求めた。

「わたし、あなたの前でも、お乳をあげたこと、ないんです……」

孝之さんが申し訳ないという表情でこちらを見つめる。

「父さんが、すまないな…」

奈々は絶句した。

(すまないな…、ってそんな……………！)

「父さんが言うことは、聞いてあげてくれ。家族なんだし、恥ずかしがることはない」

家族……。

その言葉に、わたしの思考が停止した。

家族。

確かに、これはわたしの家族だ。隣にいる孝之さんも、見つめている義父さんも、そして腕の中の理沙も。この家の、わたしの家族なのだ。

「孫の食事姿を、祖父に見せるべきではないか。わしはそう思うが、奈々さんはどう思う」

義父の声が、冷静に、そして理知的に響いた。

(……祖父に……)

わたしは、腕の中の理沙を見下ろした。

彼女はまだ、何も知らない。この世界の厳しさも、複雑さも、人間の羞恥心も。ただ、お腹が空いて、母親を求めているだけだ。

(……この子のため……？…わたしのプライドなんて、どうでもいいんだ。この子の務め……母親の務めを……)

授乳というのは、母親のクリトリスを子供が吸い上げることで行われる。そのため、よっぽどのことがない限り、授乳というのは人に見られない形で行う。

旦那や産婦人科・助産師にも見せることはほとんどない。

また、授乳といってもただクリトリスを吸わせるだけではなく、乳の出をよくするために、クリトリスマッサージや、赤ちゃんの口元にクリトリスを当てて吸引を促進するための運動など、授乳にはいくつかのやることがある。そのすべてを、義父と孝之の目の前でやれと言われているのだ。

わたしは、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「……はい、お義父さん」

わたしは、そう言った。

「わたしも、そう思います」

自分の声が、震える。

「孫の初めての食事を、ご覧になるのは、お義父さんの当然の権利です。理沙の、わたしの、務めだと思います」

義父は、小さく頷いた。

「いい心がけだ」

孝之さんは、申し訳なさが混じった顔でわたしを見ていた。

「奈々……、すまん。」

「孝之さん、大丈夫です」

わたしは、小さく笑ってみせた。

「お義父さんと孝之さんが、理沙の成長を見守ってくれるなら、わたしは嬉しいです」

そう言いながら、わたしは心の奥で自分に言い聞かせた。

（これは、恥ずかしいことじゃない。これは、わたしの役目。わたしが母親として、やるべきことなの…。）

意識して無表情を続けながら、奈々は立ち上がった。

「では、準備しますので…。」と義父に許可を求めるように呟くと、征一郎は「うむ」と静かに頷く。

2

理沙を抱いて縁側に進む。

よろけそうな足でそろそろと歩いた。縁側の座布団の上に理沙をそっと下ろすと、和服に似合う凛とした立姿の義父が奈々のすぐ近くに座る。隣に孝之も、ぎこちない様子で着座した。

奈々の顔が火照る。どうしていいか分からない。ただただ、自分の心臓が胸の中で暴れているのが分かった。

「えっと…。」と呟き、奈々は自分の服に手をかけたスカートの上からそっと下着へ手を伸ばし、指を滑らせていく。湿気を感じる下着の布。羞恥に耐えながら、それを慎重に少しずつずらしていく。

スカートの中に手を入れ、下着をずらすと、ぬるりとした感触が指に伝わる。

「……っ」

(見られてる…お義父さんに…孝之さんに…)

思わず、唇をかんだ。

すでに愛液と乳でうっすらと湿っている下着を足から外す。小さく畳んで自分の隣に置いた。これで、わたしの下半身は、丈の長いスカート一枚しか残っていないことになる。

わたしは、ゆっくりと息を吐き出した。

ここまできたら、もう後には引けない。

(母親の務め…。母親の務めだから…。)

わたしは、スカートの裾を、ゆっくりと、自分の太ももまでまくり上げた。

白くて柔らかそうな太ももが、露わになった。そして、その中央。

薄い産毛が生えた、ふっくらとした大陰唇。そして、その中心部。

少し充血して、ぽっくりと顔をのぞかせているクリトリス。

わたしの胸が、どきんと音を立てた。

義父の、鋭い視線が、そこに集中している。

「……」

(見てる…。お義父さん、わたしのクリトリスを…)

わたしの頬が、さらに熱くなった。

孝之さんは、顔を真っ赤にして、わたしの股間から目をそらしていた。けれど、その目が、ちらちらとわたしの方向に向いているのを、わたしは見ていた。

「奈々さんのクリトリスは、小さいな。これでちゃんと乳をやれているのか。」

義父が庭に出て、奈々の股を覗き込むようにして言った。

「え…。」と奈々は一瞬、言葉を失った。

（どうしよう…。）奈々は床に目を伏せて黙った。

隣で孝之も緊張したようにこちらを見ている。

実際のところ、最近の授乳は上手くいっているとは言えなかった。理沙が吸ってもあまり乳が出ず機嫌が悪くなり、授乳に1時間くらいかかることもしばしば。量も、以前よりずっと少なくなっていた気がしていた。孝之にも相談していたが、なかなか解決できずにした。

「どうした、奈々さん。」

（言わなくちゃ…。わたしの授乳の失敗を、白状しなくちゃ…。）

奈々の喉がひからびていくような感覚がした。

「は、はい…。」

「何だ」

「あまり、上手く…っていない…のかもしれません…」

「ふむ。」

（叱られる…。やっぱり叱られる…。）

奈々は身をすくませた。

「孫を飢えさせる気か。」

「ち、違います…。」

「ならば、何が原因だ。」

「わ、わからなくて…。」

「わからないではない。わたしには見えているぞ。」

義父は、奈々の股間を指さした。

「そのクリトリス、勃起していない。柔らかい。そのようでは、理沙ちゃんも吸いにくいだろう。乳も出ぬ。」

「勃起…。」

「そうだ。授乳は、母親の務め。そのための準備は万全でなくてはならん。」

「すみません、お義父さん…」

「謝るでない。行動しろ。」

「はい…。」

「まず、マッサージをしろ。自分で吸い出さなくても自然と乳が出るまでクリトリスを勃起させて大きくしろ」

「……はい、お義父さん」

わたしは、義父の言葉に従うしかなかった。

(マッサージ…。自分で、自分のクリトリスを…。ここで…。)

わたしは、震える指を、自分の股間へと、ゆっくりと、動かしていく。

(どうしよう…。どうしよう…。お義父さんと、孝之さんの目の前で…。)

わたしは、息を殺した。

スカートの裾を、もう少しだけまくり上げる。わたしの秘部が、もっと、はっきりと見えるように。

(見てる…。お義父さんが、孝之さんが、わたしを…。)

「昔から、授乳のためにクリトリスを大きく膨らませよ、と言われている。」義父が淡々と言葉を続ける。

「しっかりと乳を出せる女がいいが、そうでない女は自分の手でしっかりとクリトリスを勃起させないといかん。」

「は、はい…」と奈々は答えた。昔からこのような風習があったとは知らなかった。東京育ちのわたしには、想像もつかなかった。しかし、義父の言うことが、断定的に響く。断れない。

手が震える。

こんな状況でやれるはずがなかった。

ただ、逃げる場所がない。理沙もお腹を減らして、今にもぐずり始めそうだ。

(や、やるしか…ない…。)

わたしは、震える右手の指を、自分のクリトリスに近づけた。

指先が、自分の皮膚の熱を感じる。

じわりと熱が滲んできてくる。

(あ…あの…、やだ…)

指先が、クリトリスに触れる瞬間。

わたしの身体が、ぴくっ、と反応した。

はぁ…と、思わず息が漏れた。

自分の指の温度が、クリトリスにじんわりと伝わっていく。

「はぁん…♡」

指先で、そっと円を描くように、クリトリスをなでた。

ふっくらと膨らんだ小さくて敏感な豆。それを、ゆっくりと、やさしく、なでなでする。

「んっ…♡」

義父が見ている。孝之さんが見ている。

この家で、わたしだけが、裸にされている。

(やだ…やだ…やだ…んああ…♡)

でも、指は、動かし続けなければならない。

クリトリスを、ゆっくりと、くるくると、なでなでする。

すりすり、と、指先の腹で、やさしくこする。

ぬるりとした感触が、指に伝わる。

「んんっ…♡」

わたしの腰が、自然と動き出した。

恥ずかしい。でも、気持ちいい。

指の動きが、どんどん、大胆になっていく。

クリトリスを、つまんで、ひねって、引っ張る。

「あ、あの…っ、はあん…♡」

(お義父さん…見てる…孝之さん…見てる…わたしが…自分を…んああ…♡)

もう、恥ずかしいなんて、言っていられなかった。

わたしの指は、気づけば、クリトリスをがつつりと掴んでいた。